



ビジネストーク

## オオバナミズキンバイ

頭取 大道 良夫

琵琶湖で最近、水草「オオバナミズキンバイ」(大花水金梅)が大量に繁茂し、母なる湖の生態系を脅かしています。

北米南部から南米が原産地。琵琶湖では2009年に守山市赤野井湾で初めて確認され、142mの分布が昨年12月には推計約6万5千m<sup>2</sup>に拡大。ちぎれても茎の断片から再生して4年で460倍にも増える猛烈な繁殖力から「侵略的外来種」と呼ばれます。今年6月、在来の生態系に害を及ぼす「特定外来生物」に指定されました。

琵琶湖では、水質を浄化し、魚の産卵場所として大切なヨシ群落への影響が特に心配です。ヨシ群落保全区域の赤野井湾付近では、オオバナミズキンバイがヨシの周りを埋め尽くして魚が産卵場のヨシ群落に近づけずに漁業被害が出ているほか、水質悪化や悪臭といった私たちの生活への影響なども懸念されています。

猛烈な繁茂を阻止する取り組みも始まっています。今年6月と9月、全国から集まったNPO法人・国際ボランティア学生協会(IVUSA)の学生600人、行政、環境団体、漁業組合、企業や地域の皆さんが除去に挑み、当行員も参加しました(活動の様子は、IVUSAの公式サイトで紹介されています)。オオバナミズキンバイは繁殖力が強いためこそぎ除去しなければならず、重労働ですが、9月15日から3日間で約120トンが除去されました。

私は9月15日、激励のために現場を訪れ、繁茂の猛

威を目の当たりにしました。産卵のためにヨシにたどり着こうとしながらも、びっしりと繁殖したオオバナミズキンバイに行く手を阻まれ、絡まって死んだ大量のニゴロブナの無残な姿にやりきれない思いでした。そして、このような懸命の努力にもかかわらず、分布はすでに草津市の烏丸半島周辺や帰帆島付近、大津市では堅田周辺、疏水取水口や膳所公園周辺にも及び、日々拡大しているのです。

琵琶湖環境科学研究センターによりまずと、オオバナミズキンバイ対策は、早期根絶と拡散防止のための封じ込めが大切です。しかも、除去後、確実に死滅させる必要があるため、個人としては許可証を持った団体等が行う除去作業を手伝うことが有効です。また、個人で手軽にできるのは「モニタリング」です。自分で区域を決めてオオバナミズキンバイの有無を定期的に監視し、発見したら写真に撮り、同センターに送付します。それらは、拡散状況の把握や県などの対応に役立てられるそうです。

「未来からの預かりもの」琵琶湖の環境保護のため、今後とも官民あげてオオバナミズキンバイ駆除活動が展開されますが、地域に根ざす企業として、個人として協力してまいります。

そして、何より忘れてならないのは、この厄介者も、もともとは観賞用の園芸種として流通していた、という事実です。外国の動植物の、人災ともなりうる安易な持ち込みはくれぐれも気を付けたいものです。